ティーチングポートフォリオ　　2024（令和６年度）

山村学園短期大学　子ども学科
専任講師　巣立佳宏

1. 教育の責任

山村学園短期大学における 2021～2024 年度の担当科目は（表 1）の通りである。

（表 1）2021～2024 年度の担当科目

科目名		学期	対象学年	種別	受講数	備考
キャリアアップセミナーⅠ	2021 2023 2024	通年 前期	1 年 1 年 1 年	演習	18 名 14 名 15 名	1 クラス 教員 1 名
キャリアアップセミナーⅡ	2022	通年	2 年	演習	16 名	1 クラス 教員 1 名
保育入門	2021 2022 2023	後期	高校生 高校生 高校生	演習	20 名	1 クラス 高大連携 教員 2 名
社会的養護Ⅰ	2021 2022 2023	後期	1 年	講義	66 名 70 名 52 名	4 クラス 教員 1 名
保育の心理学	2021 2022 2023 2024	前期	1 年	講義	66 名 70 名 52 名 59 名	4 クラス 教員 2 名
乳児保育Ⅰ	2021 2022 2023	前期 後期	1 年	講義	70 名 66 名 52 名	4 クラス 教員 1 名
子ども家庭支援論	2021 2022 2023 2024	後期 前・後期 前期 前期	2 年 1・2 年 1 年 1 年	講義	72 名 66・70 名 52 名 58 名	4 クラス 教員 1 名
保育・教職実践演習（幼稚園）	2021 2022	後期 後期	2 年 2 年	演習 演習	66 名 70 名	4 クラス教員 4 名 4 クラス教

						員 3 名
基礎演習	2021 2023 2024	通年 前期	1 年 1 年	演習	18 名 14 名 15 名	1 クラス 教員 4 名
総合演習	2022	通年	2 年	演習	16 名	4 クラス 教員 4 名
実習指導 I	2021 2022 2023 2024	前期	1 年	演習	66 名 70 名 52 名 58 名	4 クラス 教員 5 名
実習指導 II	2021 2022 2023	後期	1 年	演習	70 名 66 名 52 名	4 クラス 教員 5 名
実習指導Ⅲ	2021 2022 2023 2024	前期	2 年	演習	72 名 66 名 66 名 47 名	4 クラス 教員 5 名
保育実習 I	2021 2022 2023	集中	1 年	実習	66 名 70 名 52 名	4 クラス 教員 2 名
施設実習 I	2021 2022 2023	集中	1 年	実習	66 名 70 名 52 名	4 クラス 教員 2 名
施設実習 II	2021 2022 2023	集中	2 年	実習	72 名 66 名 52 名	4 クラス 教員 2 名
教育実習 I	2021 2022 2023	集中	1 年	実習	66 名 70 名 52 名	4 クラス 教員 2 名
教育実習 II	2021 2022 2023	集中	2 年	実習	72 名 66 名 66 名	4 クラス 教員 2 名
ICT と保育	2023	後期	2 年	演習	30 名	教員 2 名
社会的養護 II	2023 2024	前期	2 年	演習	66 名 47 名	2 クラス 教員 1 名

教育の理念

私が以下の３つのキーワードを教育の理念としている。

（1）　実践現場へつなげる授業

私は子育て支援センターの保育士、児童養護施設の心理士、小学校のカウンセラー、市の教育委員会における巡回相談員など、様々な現場に勤務してきた。しかしながら勤務する中で、知識として理解していても、現場においてはうまく立ち回れず、自身の力不足を感じることが多かった。こうした様々な職場での勤務経験は現在の私の大きな糧となっている。具体的には、実際の現場において単に知識を有しているだけでなく、いかに知識を活用し、柔軟に対応していくかが必要であることを感じた。そのため、保育士・幼稚園教諭養成校での教育を実践現場における子どもへの保育・教育に結びつけていくことは意義がある。授業において学生がよりよく理解できるよう具体的な事例を多く用い、様々な子どもへの対応を学生自らが考える授業を展開している。

こうした実践現場での私の経験を学生たちに還元していくことが大学教員としての責務であると考えている。

（2）　保幼小および地域との連携

私は保育園や幼稚園、小学校、中学校、放課後等デイサービス、児童養護施設、適応指導教室など様々な場所で研修会や事例検討会を行ってきた。特に「埼玉県熊谷市大幡幼・小・中連携保護者会」では幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、保護者など 70 名以上の方々を対象に幼児期～青年前期までの子どもの発達、発達障害について講演した。他にも埼玉県熊谷市適応指導教室保護者会における研修会に講師として参加、群馬県みどり市立大間々北小学校の就学時健康診断において保護者の方々に対し「子どもへのかかわり方」をテーマに講演、埼玉県鴻巣市立小谷小学校の職員研修会にて「発達障害児への理解と対応」について講演、埼玉県鴻巣市就学支援委員会に心理士として参加し、市内全域の特別な配慮を要する児童への支援について心理的側面からの助言を行った。そうした中で、多く課題として挙がっていたのが、『情報共有』、『外部機関との連携』である。保育士や教員の多くは非常に熱心で子どもへの対応にはすさまじいエネルギーを有している。一方で、バーンアウトしてしまう保育士、教員も少なくない。

子どもや保護者への支援や援助に困ったときにどのような機関と連携し、問題に立ち向かっていくのか（問題解決能力）、学生のうちから学んでおくことは非常に意義がある。保育士として勤務した後、離職する者も少なくはない。そのため、大学において保育士が様々な社会資源を活用し、外部機関や地域と連携するための保育・教育について伝えている。

地域との連携の実践例として、2018 年度には横浜保育福祉専門学校総合学科夏季公開講座に講師として参加し、高校生を対象に「保育の心理」について講演を行った。ま

た、同年にセーリングワールドカップシリーズ江の島大会において学生を引率し、来場された子どもや保護者に対して、紙コップで作成する“ヨット”を用いて学生の交流を援助した。

2019 年度には前橋市まちなかキャンパス講座に講師として参加し、「フラワー曼荼羅ぬり絵～心身の健康と脳の活性化～」を前橋市民に対して実施した。加えて、同年に前橋市七夕祭りに学生引率として参加し、来場された子どもや保護者の方々に対して、学生が演劇やボールプールなどを通して交流することを援助した。他にも群馬県教育委員会主催「高校専門教育研修講座」に講師として参加し、県内の農業高校に勤務する教員を対象に「交流活動における児童生徒理解やコミュニケーションに関する技術や知識」について講演を行った。

2020 年度では里山保全の体験に学生と共に参加し、森の下刈りや自然について触れ、鳩山の里山保全の方々と交流を行った。

子ども虐待防止の一環としてオレンジリボン運動をゼミにて実施した。学生と共に行い、児童虐待の予防及び周知を行った。その結果は報告書として「オレンジリボン運動―子ども虐待防止―」のホームページ内にて公開されており、誰でも閲覧可能である。

2021 年度では小川町七夕祭りの準備を行い、学生と共に活動し、地域との交流を行った。継続してオレンジリボン運動に参加し、ゼミ活動内において、オレンジリボンを作成し、学内の学生に配布した。また、虐待予防の啓発を目的として動画を作成し、SNS（TikTok）に投稿し、広く周知した。

2022 年度においては小川町七夕祭りに学生と共に参加し、絵本“はらぺこあおむし”をテーマにした飾りつけを展示した。また、日本虐待防止ネットワークの「学生によるオレンジリボン運動」に参加し、オレンジリボンの制作、オレンジ本運動啓発用動画を作成した。加えて、鳩山町子育て応援講座に講師として参加し、「ママパパの“思い”が伝わる、お子さんへの話し方・ほめ方・叱り方」をテーマに講演するとともに学生 3 名を引率し、親子遊びを行った。

2023 年度は子育て支援センターぽっぽでの子育て講座、小川町の七夕祭りへの参加、、川越市駅でのオレンジリボン配布、鳩山町祭りのボランティア引率、鳩山町子育て応援講座に講師として参加した。

子育て支援センターぽっぽでの子育て講座では、親子の交流を目的に A4 のキャンパスにこいのぼりを制作した。

小川町の七夕祭りでは教員や学生らとともに当日に向けた準備や会場での見回りを行った。

オレンジリボン配布はゼミ活動の一環として、川越市駅の改札前にてオレンジリボンの配布を行った。約 200 人分のオレンジリボンを学生とともに制作し通行人の方々に配布した。

2024 年度は鳩山わくわく WORK にて箱庭療法の出店し、約 150 人が箱庭の体験をし

た。また、オレンジリボンの配布を 100 名分行った。

(3)　インクルーシブ保育、大学教育における合理的配慮

発達障害というワードが近年、保育・教育現場だけでなく社会的に話題となっている。私は発達障害を有する、または疑われるような子どもに数多く携わってきた。子どもに対して遊戯療法や箱庭療法などのカウンセリング、ソーシャルスキルトレーニングなど様々な方法を用いて、子どもが保育園や小学校など社会性の求められる場で生活しやすいよう実践してきた。これは単に日常生活における支援ではなく、子どもたちの将来を見据え、いかに生きやすい生活を提供していくものである。「生きる力」を子どもたちが身につけられるよう、適切な支援方法を検討し、提供してきた。

私はこの経験を学生たちに伝え、保育現場で障害を有する子どもたちが生活しやすい社会を実現したい。そのため、学生のうちから発達障害について具体的に理解し、どのような保育・教育を行うべきか学べるような授業を実践している。

また、大学に在籍している学生に対して合理的な配慮は重要である。私がこれまで専門学校、四年制大学、短期大学と勤務する中で学生が学業を継続するうえで、個人の特性や過去の背景など授業のみを担当するだけでなく、様々な合理的配慮を行う必要性を感じた。学生によっては授業での座席の配慮、別室での試験の実施などの合理的な配慮を行うことで、学生自身の能力が十分に発揮できるケースも見受けられた。そのため、学生がインクルーシブな保育を子どもに実践することを学ぶだけでなく、教員側も合理的な配慮を学び、学生がより良い学生生活を送れるよう配慮していく必要性を感じた。

2. 教育の方法

(1)　アクティブ・ラーニング

私は授業において“学生との対話”を重視している。教員が一方的に話すのではなく、学生に問いかけ、主体的に考えられるよう授業を展開している。特に 1 学年の学生は高校時代に教科書の音読や教師からの質問に答えることなどに慣れている。話を聞くだけの講義では集中力の持続が難しいと考え、学生が発言し、意欲的に参加できるような授業内容を設定している。

学生が自ら主体的に考える力を身に付けるため、様々な現場での子どもや保護者、保育士、教職員の方々から学んだことを架空の事例を用い、授業を展開している。例として、架空の事例や映像教材などを用いて、学生一人一人が保育士の立場から、どのような対応を行うか考える授業である。事例問題に関して、学生のうちから触れていくことは非常に意義がある。実際の現場では画一的な答えはなく、各々の現場において、答えが異なることが多いためである。授業の講義で得た知識をどのように実践へ落とし込むか、その方法を様々な角度から検討している。こうした検討を繰り返していくことにより、学生が実際の現場においても対応できる力が身に付くのである。また、実習などにおいても学生が初めて発達障害などの障害を有する子どもと出会うことが多い。そうし

た際に、学生はどのように対応して良いかわからない。そのため、実習前に障害を有する子どもへの対応や障害の特徴について検討しておくことで、柔軟に学生が対応することができる。

事例問題を解く中で、答えが一つであるとは限らない。そのため、学生と教員の双方向対話型授業を展開している。具体的には事例問題の解答を学生たち数人にマイクを手渡し、発表してもらう。そうして多種多様な対応があることを理解してもらう。また、ステージ上にてロールプレイを行い、視覚的にも理解しやすいよう努めている。特に心理学の実験などをステージ上にてロールプレイを行い説明すると、多くの学生から「理解しやすかった」と授業の感想をいただいた。こうした双方向対話型授業やロールプレイを行うことにより、学生の理解が深まり、体験することで実際にどう対応したらよいか理解できるのである。

今年度アクティブラーニングを用いる中で、環境構成も非常に重要であることを感じた。私は以前に一般企業の行っているアクティブラーニングの研修に個人的に赴いたが、そこでは建築家など様々な業種の方がアクティブラーニングに興味を持っていた。

その中で重要視されたのが、イスや机である。今年度は本学の教室の机、イスが一部整備された。話し合いを行いやすい環境となり、学生同士での対話が非常にしやすいものとなった。

(2) 授業の工夫

授業の流れとして、以下の通りに行うことを意識している。

①前回の復習
②講義
③グループワーク、事例問題
④振り返りや次回の予習

① 前回の復習

授業を始める際には、必ず前回の授業の復習を行っている。復習は配布プリントに記入する形式で実施している。復習問題は前回の配布プリントから問題を作成している。そのため、前回の配布プリントを持ち込み確認している。また、EduNavi から前回の資料をダウンロードし、スマホでの閲覧を行う学生もいる。解答後は前回の授業のポイントについて質問し、学生が答える。双方向型授業を毎回実践している。集団の場の中で発表することが苦手な学生もいるが、問題を簡単にすることに加え、近くに座る学生が手助けするよう周知しているため、発表しやすい環境を整えている。

②講義

講義ではパワーポイントの資料を基本的に配布することが多い。パワーポイントに

は、講義内容だけでなく、ＱＲコードなどを載せ、具体的な厚生労働省や様々な活動団体の資料や映像を盛り込み、学生の好奇心や学習意欲が持続するように配慮している。

また、教科書の輪読、EduNavi を用いて、意見の投票、その場でのフィードバックも行っている。

2022 年度にはパソコンを授業に持ち込み、紙媒体の資料は受け取らず、EduNavi からダウンロードした資料に講義内容を入力する学生の姿も見られた。

2023 年度からは黒板を積極的に利用し、資料の内容を図示することや教科書には載っていない補足事項などを学生たちに明示した。口頭での話だけでは教員の話を聞き漏らす学生もいるため、黒板などを使用し、丁寧に説明することを心がけた。

③グループワーク、事例問題

授業内容に則した事例問題を設定し、授業で学んだ内容を実践でどのように活かすのか、資料とは別にワークシート等を配布し、学生一人一人が知識を活用し、問題解決能力を身に着けられるような取り組みを行っている。また、グループに分かれて話し合うことで他者の意見を聞き、多様性のある考えが得られるように授業を設定している。

その他に実習などで必須のスキルとなるおむつ替えに関しては実際に人形を用いて学生たちの前で実践し、理解しやすいような授業を展開している。また、ロールプレイとして学生たちの中から数人が教壇の前に立ち、実際の保育場面での子どもとの関わり方などを視覚的に理解できるよう授業を展開している。

事例を通して学ぶことで、学生が実際の現場に出た際、どのような対応をするべきかだけでなく、知識として今何を学ぶべきか考えられるような授業を展開するよう心がけている。

④振り返りや次回の予習

授業の最後には振り返りを行い、その日の講義で何を学んだかポイントを確認している。授業内容によっては EduNavi を用いて、感想の記述を学生に求めている。次回の授業に関して予習が必要な場合には、簡単な課題を出し、EduNavi やプリントでの提出を求めている。

授業終了 10 分前には EduNavi の課題を実施する時間とともに質問のある学生に対応する時間を設けている。

(3) ICT の活用

近年、保育園や幼稚園、児童養護施設では ICT を幅広く活用している。実際に昨年度の研修出張の中で児童養護施設の小規模ホーム長などと情報共有する中で、日々の子どもの記録をスマートフォンやパソコンを用い、情報共有をするアプリを使用していた。本学の学生は当然のようにスマートフォンを持っているが、保育にどのように活用して良いのかわからないことも多い。そのため、実際の現場での ICT 教材の使い方なども紹

介し、利用の仕方を学べるような授業を展開していく。

そして、ICT は保育のみならず、様々な分野での今後の大学教育において必須である。また、社会的な情勢として新型コロナウイルス禍のため、遠隔授業やテレワークなど ICT の活用が推進されている。本学では ICT の活用として EduNavi を用いている。EduNavi を用いることですべての学生が個々の時間割や授業のシラバス、授業アンケートを WEB 上で利用することができる。

私は特に作年度からはほぼ毎時間の授業で必ずこの EduNavi を活用している。1 年生にはまず EduNavi の利用方法について説明することから始め、OfficeWord,Power Point,Exel の閲覧および使用方法について確認した。学生の多くはパソコンを用いて Office ソフトを用いるよりもスマートフォンを用いてレポート作成することを希望している。また、実際に動画の撮影を行い、動画を WEB 上にアップロードするなどの基礎的なことから始めている。そうした結果、数回のレクチャーを行うだけで、学生たちは EduNavi の使用に対応している。

授業では毎回、初めに行う前回の復習から EduNavi を使用し。実際に学生たちがどんな問題を間違えているのか閲覧することもでき、学生の苦手とする問題、得意とする問題が明らかである。

提出物の管理に関しても EduNavi を用いることで非常に教員としても負担が軽減する。まず未提出者の管理である。これがクリック一つですぐに確認できる。また、名前の順番に提出物を揃える煩わしさがなく、Exel ファイルで一度に閲覧できるという利便性もある。

他にも授業中に学生たちの解答を即座にフィードバックし、その場で学生たちの解答に対応できる。また、意見に対して学生全員と共通理解を深めることができる。加えて、投票などの機能を用いることで、学生たちへ質問した際に手を挙げて数えることや、引っ込み思案の学生が手を挙げないことも少なく、気軽に学生自身が自分の意見を伝えることができる。こうした普段あまり意見を言わない学生などがこうした ICT のツールを用いることで意見を言えることは EduNavi を大きく評価できることだと感じている。

こうした ICT を用いることで学生にとっては紙の資料媒体を持ち歩くこともなく、スマートフォンやパソコンで授業が成り立つ。しかしながら、学生の多くは紙媒体でのプリントを求める声も多いため、ペーパーレスと紙媒体の両方に対応していくことが必要だと感じる。

ICT に関してはスマートフォンの使用や様々なツールを手探りで行っている状態である。今後も様々な ICT の研修や事例などから学び、学生に対して還元していきたい。

また、保育の現場の中では ICT の活用は必須であり、大学教育において推進していく必要がある。実際の研修や ICT の教育関係のイベントに参加し、学んでいきたい。

3. 教育の成果・評価

2024 年度前期はコロナが明け、学生とのやり取りにおいてロールプレイを実施しやすく、一人一人の様子を丁寧に観察することもできた。また黒板に板書する機会が増え、口頭での話だけではなく、授業内容を図示することや授業のポイントを明確に示すことができたように感じられた。しかしながら EduNavi の使用が困難な学生がおり、ICT の活用には多くの余地がある。

2024 年度授業アンケート結果に関して、保育の心理学では以下の図の通りである。

1，欠席または遅刻・早退をせずに受けましたか。	4.6
2，私語を慎んで授業を受けましたか。	4.6
3，授業の要点を配付プリント等にとっていましたか。	4.6
4，シラバスは授業内容や評価の基準等を知る上で役に立ちましたか。	4.6
5，予習・復習及び技術向上のための努力をして授業に臨んでいましたか。	4.4
1，授業内容は、シラバスに示されていた学習目標と合致していましたか。	4.7
2，授業内容のレベルは適切でしたか。	4.6
3，授業の進度（速さ）は適切でしたか。	4.6
4，この授業を通じて知識が深まった、能力が高まったと感じますか。	4.6
1，教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかったですか。	4.4

2，授業の説明の仕方は分かりやすいものでしたか。	4.5
3，授業中の板書やプロジェクター(パワーポイント等)の利用は適切でしたか。	4.5
4，教材や資料はよく準備され、うまく活用されていましたか。	4.5
5，教員は学生の質問に適切に対応し回答していましたか。	4.5
6，学生の理解を深めよう、能力を高めようとする工夫や努力が感じられましたか。	4.6
全体的に見て、この授業に対するあなたの評価はどの程度ですか。	4.4

2024 年度授業アンケート結果に関して子ども家庭支援論では以下の図の通りである。

1，欠席または遅刻・早退をせずに受けましたか。	4.5
2，私語を慎んで授業を受けましたか。	4.5
3，授業の要点を配付プリント等にとっていましたか。	4.6
4，シラバスは授業内容や評価の基準等を知る上で役に立ちましたか。	4.3
5，予習･復習及び技術向上のための努力をして授業に臨んでいましたか。	4.2
1，授業内容は、シラバスに示されていた学習目標と合致していましたか。	4.3

2，授業内容のレベルは適切でしたか。	4.2
3，授業の進度（速さ）は適切でしたか。	4..2
4，この授業を通じて知識が深まった、能力が高まったと感じますか。	4..4
1，教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかったですか。	3.8
2，授業の説明の仕方は分かりやすいものでしたか。	3.9
3，授業中の板書やプロジェクター(パワーポイント等)の利用は適切でしたか。	4.2
4，教材や資料はよく準備され、うまく活用されていましたか。	4.1
5，教員は学生の質問に適切に対応し回答していましたか。	4.1
6，学生の理解を深めよう、能力を高めようとする工夫や努力が感じられましたか。	4.3
全体的に見て、この授業に対するあなたの評価はどの程度ですか。	4.0

4.　教育の改善に向けた今後の目標

（1）短期的目標

授業内容を分かりやすくするとともに教員の話し方を明瞭にすることが一番の課題である。引き続き事例問題やロールプレイなどを用いて、学生が理解しやすい授業を展開していく。説明の仕方など口頭では理解しにくい内容などは図示するなど視覚的にわかりやすいよう工夫していく。

予習や復習などに関しては授業内での振り返りを行い、学生が授業の見通しを立てられよう配慮し、なぜ予習や復習が必要なのか意味づけを丁寧に説明していく。

（2）長期的目標

学生自身が今授業の何を学び、何を身に付けているのか、各個人で理解できるよう授業を設定し、自ら主体的に学べるよう工夫していく。

（3）今後の教育活動について

①実習の重要性を伝える教育

実習は学生にとって授業で学んだ知識を実践の場で活かす重要な機会である。授業内での実践を学生たちがどのように活用していくか教員が理解を深め、伝えていく必要がある。学生一人一人について理解を深めていき、指導案の作成や責任実習などきめ細やかな指導を行えるよう努めていく。

②学生に還元するための研究

私はこれまでの現場経験を学生たちに伝えていくとともに、保育現場でのフィールドワークなどを通して、保育現場での実践や保育現場で求められる大学教育について研究という視点から理解を深めていきたい。

保育現場の状況は日々変化している。時代のニーズに応じた保育士を養成していくためには、現在の実践の場における保育について教員が理解し、学生たちに伝えていく必要がある。

③社会の一員としての成長するための教育

学生は大学を卒業後、保育士として自ら考え、行動していかなければならない。その基盤となるのは大学での学びである。そのため、現在の学びをどのように現場の中で活かすか理解することが重要である。また社会においては社会的なコミュニケーション力や自身の長所を活かし、短所を補うなどの必要性も出てくる。単に保育士を養成するのではなく、一人の人間として社会で活躍できるような人材を養成していくことも教員の責務であると考える。そのため、学生が社会の一員として、立派に活躍できるよう手助けしていきたい。

5.分掌

本学の分掌において、入試広報委員会、学生支援委員会、実習委員会に所属している。

（1）入試広報委員会

入試広報委員会では TikTok を用いた SNS 広報を中心に担っている。

SNS 広報を行う目的は主に以下の 3 点である。

①入学者数増加

②大学の知名度を高める

③学内外での活動や授業の実践を広く周知する

上記 3 点の中でも①入学数増加は喫緊の課題である。入学者数増加のためには OC の参加者を増やすことや参加した高校生と直接的につながりを作ることが重要であると私は考える。この高校生と直接つながりを作るためのツールとして SNS が有用である。LINE や Instagram は近年他の大学、専門学校が当たり前のように使用している。それに加え、2022 年度には TikTok を高校生とのコミュニケーションツールとして用いる大学・専門学校が爆発的に増加した。また、大学・専門学校のみならず高校にも波及し、普通科高校・通信制高校が公式でアカウントを立ち上げ、入学者数が増加したことがメディアで報道されている（北海道　札幌新陽高校の事例）。また、高校でも TikTok 部という部活を立ち上げている。②の大学の知名度を高めることとも関連するが、SNS やメディアで注目を浴びることは①入学者数の増加と②大学の知名度を高めることに大きく関連する。③に関しては SNS を通して、授業風景や学生の日常の様子、課外活動などを SNS で発信していき、①②につなげていく。

（2）実習委員会

実習委員会では教育実習Ｉと施設実習ＩＩを中心に担当している。

教育実習Ｉでは主に実習先の選定、調査書の集計、記録の書き方に関する指導などを中心に行っている。

学生が実習を円滑に実施できるよう努めている。特に記録の書き方に関する指導については、学生にとって初めての実習のため丁寧に指導している。また、事務手続きや書類の準備なども学生にとっては初めてのため、細かく指導を行っている。

施設実習ＩＩに関しては、特に児童養護施設に関する実習の指導を中心に行っている。実際に勤務した経験があることから、子どもへの対応や施設での立ち振る舞いなど具体的に学生がイメージできるよう指導している。

（3）学生支援委員会

学生支援委員会では個別の学生に対してフォローアップを行い、退学防止、学生の怠学を予防し、健やかに日々の学生生活を営めるよう尽力している。

主にマナー向上運動やサークル紹介などを担当している。学生が社会に出るにあたって挨拶や奉仕活動をきちんとできるよう指導している。

また学生動向の把握も学生支援においては重要であり、日々学生と話す中で普段とは違った様子はないか注視している。

（4）ワーキンググループ（SDGs 部会）

SDGs 部会では、学内の SDGs における活動や社会貢献として本学がどのように貢献できるか検討している。具体的にははちみつの採集、どんぐり銀行に関する活動などである。

6.エビデンス一覧

(1)　各科目シラバス

(2)　授業時配布プリント

(3)　試験問題

(4)　成績集計結果

(5)　授業アンケート結果

以上